



監督・脚本＝メノ・メイエス／
 出演＝ジョン・キューザック／
 ノア・テイラー（東芝エンタテ
 インメント配給／2002年ハンガ
 リー・カナダ・イギリス合作映
 画／108分）

アドルフとは、その名を知らない人はいない、アドルフ・ヒットラーのこと。伍長として第一次世界大戦に従事したヒットラーは、大戦終了後、画家と政治家の2つの途があった。あの時、彼の才能を見抜いたユダヤ人画商マックスによって個展が開かれていれば、世界の歴史は大きく変わっていたのかも……。

🎬 アドルフとは何者か？

モーツァルトを知っていても、アマデウスを知っている人が少ないように、ヒットラーを知っていてもアドルフを知っている人は少ないはずだ。またナチスドイツの「総統」であり、ユダヤ人を迫害したヒットラーを知っていても、その青年時代、第一次世界大戦にドイツ軍兵士として参加し、西部戦線に配属されて勇敢に戦い、第一級鉄十字勲章を授与されたことを知っている人も少ないはずだ。

🎬 ヒットラー映画あれこれ

ヒットラーを風刺的に描いたあまりにも有名な映画はチャップリンの『独裁者』（40年）だが、これを見れば、狂気に狂い、1人で恍惚として世界制覇を夢見るアドルフ・ヒットラーの人物像が実によくわかる。もちろんそれ以外にもヒットラーとナチスドイツによるユダヤ人迫害を描いた映画には、『シンドラーのリスト』（93年）、『ライフ・イズ・ビューティフル』（98年）、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）など、多くの名作がある。しかしこの『アドルフの

画集』という映画は、これまでとはまったく違う視点からアドルフ・ヒットラーを描いたものだ。それはすなわち、若き日の「画家」としてのアドルフだ。

知られざる、「画家」としてのヒットラー

画家志望だったヒットラーは、1907年つまり彼が18歳の時、ウィーン造形芸術アカデミーの入学にチャレンジしたが失敗。翌年の再挑戦も失敗し、挫折した。ヒットラーはこの時、画家よりも建築家に向いていると言いつ渡されたが、建築家を目指すための工業大学の入試も、資格要件を満たさなかったため、実現しなかった。ヒットラーはウィーン造形美術学校の入試失敗後、下宿から「蒸発」し、絵葉書売って生活費に充てるような生活を送ったということだ。

第一次世界大戦とヒットラー

第一次世界大戦は1914年8月に始まり、1918年11月ドイツの敗戦で終了した。ヒットラーは24歳の時、オーストリア国籍のままドイツ帝国陸軍に志願して西部戦線に配属され、大戦中、勇敢に戦った。そして1918年8月一般兵としては珍しく、第一級鉄十字勲章を授与されたが、4年間の兵役中、昇進は伍長にとどまった。そして1919年6月に調印されたのが、ドイツに対して①過酷な賠償と②領土の割譲そして③軍備の制限を課した屈辱的なベルサイユ条約だった。多くのドイツ人がこの条約に不満と反発を示したが、ヒットラーの反発はこの他強く、この「反発心」が後のナチス台頭の要因になったと指摘されている。

政治家としてのヒットラー

第一次世界大戦の敗戦と屈辱的なベルサイユ条約の調印は、ドイツ国内に不穏な雰囲気をもたらした。兵役中、共産主義の浸透を防止するため兵士たちを煽動（プロパガンダ）する任務を担っていたヒットラーは、持ち前の「雄弁術」を駆使して、次第に頭角を現した。彼の属する政党はドイツ労働者党。これは1920年に国家社会主義ドイツ労働者党に名称を変更した。すなわちナチス党の誕生だ。そしてヒットラーは、何と翌1921年その党首となった。その後のナチスの挫折と復活そしてその脅威的な台頭の物語はここでは省略するが、この映画でのヒット

ラーの演説ぶりは、すごい。例えば竹中平蔵金融・経済財政政策担当大臣が理路整然と金融問題を解説していく姿とは全く異質で、必ずしも十分な内容を含んだ演説ではないが、しかし論点と自己主張を1つにしぼって単純化し、それをオーバーな身ぶりや絶叫的な喋りで聴衆のハートに訴えかけていく演説スタイルは、当時としては珍しいものであり、広く大衆の心を捉えたことはまちがいない。この映画では、こんな若き日のヒットラーをノア・テイラーが見事に演じている。

ユダヤ人の画商マックス・ロスマン

この映画には、ユダヤ人の裕福な家族で育ち、大戦に従事し、そこで右手を失ったマックス・ロスマン（ジョン・キューザック）という人物が登場する。彼は大战後、鉄工所の跡地に画廊を開き、画商として十分な成功を収めていた。そんなロスマンが偶然知り合ったのが復員兵である若きヒットラー。ロスマンは自己を見失っているヒットラーを励まして創作活動を続けることを説得するが、ヒットラーは他方で政治への関心を断ち切れずにいた。

また、生活費を保障するという陸軍将校の勧めによって、ヒットラーは「演説台」に立つことも。そこで語るヒットラーの言葉は、「反ユダヤ主義」……。そんな中、2人の間に芽生えていた友情と信頼は……。この映画の実質的な主人公ともいえるロスマンは実在の人物ではないが、ヒットラーの周囲に彼のようなユダヤ人画商が存在していたことはまちがいないらしい。

もし個展が開かれていれば……

ヒットラーは、政治と絵画との間で迷い闘っていた。ロスマンが望むような絵を次々と創作することができずに苦しむヒットラー。2人の絵や芸術に対する理解は全く異質のものなのか……。そんな中、偶然ヒットラーの部屋で見たゲッサンの魅力に目を奪われたロスマンは、成功するとの確信を持って個展を開くことを約束し、ヒットラーに待ち合わせの時間と場所を指示した。もしこの約束どおり個展が開かれていれば、ヒットラーは画家としての自信をつけ、その途で成功し、世界の歴史は大きく変わっていたのかも……。そんなことを考えさせられるちょっと異色の映画だった。

2004(平成16)年2月3日記